



全国的に、RSウイルス感染症が流行し、百日咳、りんご病がじりじりと出てきました。いずれも、大人や年長児は軽く済むことが多く、知らないうちに感染源になっていることが多いです。大人も必ず受診して、医師の指示を仰いでください。

あけぼのトピックス



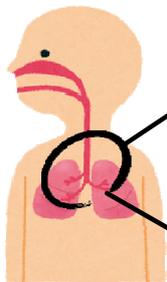
ぜん息



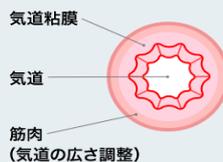
呼吸器の感染症がきっかけで、ゼイゼイ、ヒューヒューと、気管支炎のような呼吸音や、息苦しそうなきが増えています。年々、ぜん息にかかる子は増えていますが、診断や治療が発展している為、大きな発作が起きないようにコントロールしながら、普通の生活を送れることが多いです。

まずは、そんな「ぜん息」からお話します。

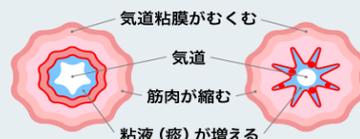
ぜん息は、ほこり、ダニ、カビ、ペットアレルギー、たばこの煙、大気汚染、激しい運動、感染症、柔軟剤や香水、消臭剤の香料などいろいろな原因で発作が起こります。気管支が縮み、気道の粘膜はむくみ、痰が増え、空気の通り道が狭くなります。その為、ゼイゼイ、ヒューヒューという呼吸音になり、咳が続き、呼吸困難になります。そして、発作が起きていないときも、気道では炎症が続き、わずかな刺激で発作が起きる状態になっています。この慢性的な気道の炎症を治療することが重要です。気道の炎症は外から見えないので、発作が起きなければ、「大したことはない。」と油断してしまいがちです。下図をご覧ください。この「症状がない時」にも、きちんとフォローすることによって、今後の健康状態が大きく変わってきます。ここで放っておくと、発作が起きやすくなったり、運動ができなくなったり、他のアレルギーが出やすくなったりするのです。



正常な気道の断面



ぜんそくの患者さんの気道の断面



症状がない時

症状がある時

受診のポイント



こんなことをメモして受診しましょう。



- ・ 症状があるのはいつ頃から？
- ・ 症状 … どんな時に咳が出るか。食事、運動、睡眠時など。ゼイゼイ、ヒューヒューなどの呼吸音がするか。どれくらいの頻度で発作が起きているか。咳の強さは、眠れない程か、しゃべれない程か。呼吸をする時、肩を上げ下げしたり、小鼻が膨らんだりしていないか。呼吸が浅いか、速いか。
- ・ 他のアレルギーはあるか … アレルギー性鼻炎、花粉症、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなど。
- ・ 家族、血縁関係で、アレルギー疾患のある人はいるか。
- ・ 治療をしている場合は、治療の状態。薬、使用期間など。



伝染性膿痂疹 ～ とびひ ～



この秋も高温多湿が長引くとこの予報が出ています。気温が高く、ジメジメとした気候は、とびひになりやすく、悪化しやすいです。あけぼのでもはやり始めた「とびひ」について、お話しします。

とびひはバイキンによる皮膚の感染症です。ブドウ球菌や溶連菌など、いろんなバイキンが原因となります。虫刺され、湿疹、あせも、ケガの痕、水いぼなどを搔いて、そこからバイキンが広がっていきます。また、鼻の穴はバイキンが多いので、鼻をよくいじる子は、そこからとびひになりやすいです。鼻の周りが膿んで来たら要注意です。特に、アトピー性皮膚炎乾燥肌など、皮膚の繊細な子は、悪化しやすく、長引きやすいです。皮膚の状態によっては治療法が複雑になることもあります。とびひの部分とかぶれの部分と塗り薬が異なる場合もあります。飲み薬も、抗生剤やかゆみ止めなど、複数必要なことがあります。大きく広がらないうちに、皮膚科を受診しましょう。

きれいに洗いましょう



傷口は優しく丁寧に洗いましょう。せっけんも使ってかまいません。湯ぶねに入らず、シャワーがオススメです。長湯すると、かゆみが増します。また、浴槽などについた菌が他の家族にうつることもあります。家族間で感染がひろがらないように、タオルなどは共用しないでください。

いろんなとびひがあります

見た目は、いろんな形の傷をつくります。水ぶくれができて皮がむける場合、かさぶたができる場合、膿が広がる場合、赤みが強い場合など、いろんなとびひがあります。



注意 SSSS ～ ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群 ～

ブドウ球菌が産み出す毒素によって、皮膚の表面がただれ、やけどのようになり、膿がべったりとつき、ペロペロと皮がむけます。さらに悪化すると、高熱が出て、血液によって全身にバイキンが運ばれ、敗血症になります。初期段階で、徹底的に治療しておけば、こうはなりません。

何度もかかります



いろんなバイキンが原因となるので、免疫はできません。皮膚のバリアを破って、バイキンに感染すると、何度もとびひになります。その度に、早めに受診しましょう。

ガーゼなどでおおって来てください



「傷がむれるので、おおわないで。」と病院で言われることもあります。しかし、保育園は集団生活なので、すぐに感染が広がってしまいます。感染拡大防止の為、必ずおおってきてください。また、必要に応じて、ぬり薬・ガーゼ・包帯などをお預かりしますので、職員へご相談ください。顔など、おおえない場合は、医師にご相談ください。「保育園へ行ける状態か。行っても悪化しないか。他の子にうつさないか。」と必ずご相談ください。



9月号、いかがでしたか

熱だ、咳だ、ブツブツだ、めやにだ、とびひだ…と、我ながら、いつも口うるさいなと思います。登園時に体調を事細かに尋ねることもしばしば…。これは、感染拡大防止の目的もありますが、何より、その子自身がつらくならないように、そして、保護者の皆さんの負担が最小限で済むようにと、お話しています。治り切らないうちに登園すると、ズルズルと長引くことになり、結果的に、早退や休みが続くことになります。特に、入園後1～2年位は、いろんな感染症にかかります。できるだけ多くの人たちに理解、協力してもらうことができれば、早期治療につながるの、理想的ですね。

寺澤